

## 一章

セバルト・リーツは目を覚ました。

横たわっている体を持ち上げると、穏やかな草原が周囲に広がっている。

空は青く、太陽が輝き、黄色や紫色の花の間を蝶や虻が舞っている。

いったい何が起きたのかと立ち上がり、目をこらして周囲を見渡し、頭の中を整理する。つい先ほどまで魔神と死闘を演じ、そして倒した。それは間違いない。

魔神が消滅する瞬間をこの目で見届けたのだ。それはいい、そこは安心していい。

問題はその後だ。

暗い岩場で戦っていたはずが、景色がゆがみ、感覚が狂い、気がついたらここにいた。

「空間転移したのか？」

英雄と魔神、二人の発した巨大なエネルギーが激突し、それが空間に干渉する魔法のごとくに働き自分を異なる場所へ転移させた可能性に思い至る。

それなら、ここがどこかを調べなければとセバルトは歩き始めた。

「なんだか、体が軽いな」

戦闘が終わってから多少時間が経っているのか、体力はある程度回復している——だけではない。長年の戦いに終止符をうつことができたからだ。多少のアクシデントなど、魔神を討ち、人間を

侵略していた魔軍を倒した、そのことに比べれば些細なことだろう。

「そうだよ、ようやく全部終わったんだ。小さいことは抜きだ。よし、気分よく凱旋しよう！」  
自分の顔を軽くはたいて気分を変えると、久しぶりの明るい景色を満喫しながら、平和になった世界にゆつくりと歩を進める。

魔物達の支配者である魔神を倒すための旅に出て十年。年より細かい日付はとくにわからなくなつた旅路の果てに、世界に平和をもたらしたのだから。

「こんなところにトロールが出るなんて！ くそっ！」

だが、しばらく歩き森に近づいた時、突然焦つた男の声がセバルトの耳に飛び込んできた。

トロール——巨体をもつた妖鬼の魔物だ。セバルトは声かした森の中へと素早く向かう。

森に入つてすぐのところ、セバルトより少し上くらいの年齢の男が、複数のトロール相手に槍を突き出し、なんとか近づかれまいとしていた。

その近くには、負傷してうずくまる者が二人いる。声を上げ、威嚇しながら距離をとろうとしている様子からして、まともに戦つて勝てる相手ではないようだ。

一体のトロールが槍をすり抜け丸太のような豪腕を振り上げ、男を叩きつぶそうとする。

セバルトは一ステップで男の前に移動すると、振り下ろされた腕を片手で軽々と受け止めた。

男が何が起きたか理解できない様子で固まる。

(トロールは物がこすれた際に起きる雷すら嫌がる。なら、この魔法がいいな)

雷魔法『紫電の糸』。

マナが圧縮され紫の輝線に変化、高速で全てのトロールの体に巻き付く。直後に強烈な電撃が魔

物達を襲い、一撃ですべての魔物が絶命した。

魔物達は溶けるように消滅し、あとには魔法の源であるマナが宿った骨の一部だけが残された。  
(よしよし、弱点にびつたりはまったぞ。気持ちいい)

「な——？ なに、が」

セバルトが満足げにしている後ろで、男は助けが入った時以上に驚いた顔になっていた。

「あんた今何をやったんだ！ トロールを一瞬で倒すなんて！」

槍を構えたまま、早口でまくし立てる男に、セバルトはこともなげに言う。

「雷の魔法を使いました。弱点なので効率がいいです」

「いやそれは見ればわかる！ そういうことじゃなくて、一体今の魔法は何なんだ。あんな魔法、見たことも聞いたこともないぞ!」

興奮気味にまくし立てる男にセバルトは眉根まゆねを寄せる。

〔『紫電の糸』は雷の魔法として代表的な物の一つのはずだけど、魔物と戦うような人が知らないのか?〕

もちろん、セバルトが使えばそれは並の使い手の物とは段違いの威力になるが、使った魔法自体は変わらないはずなのに。

「それにこのあたりじゃそうそうお目にかからない大物だぞ、トロールなんて。そんな魔物達を一撃で倒すなんて、あんたいったい!? 町の人間じゃないよな、いたら知らないはずがない。……つと、そうだな。驚くよりも感謝が先だったな。あまりのことに忘れちまってたぜ」

まくし立てていた男は、少し落ち着いて頭を下げた。

「助かった、恩に着るぜ。俺達は町の近くの化物退治に来たんだが、逆にやられかけてたんだ。あんたが来なけりゃ全滅してたかもしれない。本当に恩人だ」

リーダー格らしい男が言うと、怪我をしている男達も、地面に倒れたまま頷うなずき同意する。

「いや、そんなにたいしたことはしてないですよ」

「んなことねえよ！ 超たいしたことあるから！ なあ！」

「そうだよ、とんでもねえ！ あんたのたいしたことの基準どうなってるんだ!？」

男達が目と口を大きく開いて否定する。

（んー。本当にたいしたことしたつもりはないんだけどな）

トロールは中級程度の魔物で、セバルトがこれまで相手にしてきた最上級の魔物とは桁違けたちがいだ。一般的に言っても大物というほどではないというのがセバルトの認識なのだが。

（ちよつと思議だけど、とりあえずはいいか。何はともあれ人間に会えてよかった）

平和な景色だけでなく、人間もいる。これで完全に安心だとほっと胸をなで下ろす。穏やかな景色ではあったが、人の姿がなかったので、人里に帰ってきたのか少し不安だった。

（落ち着いて考えてみれば……魔神を倒してから初めて会った人間だなあ。せつかくだし、思う存分褒めてもらってしまえ）

セバルトは男達の方に顔を向けると、

「いやいや、たいしたことないですよ、本当に。全然。まったく」

手を振ってわざと謙遜けんそんしてみる。

「いや、たいしたことあるって！ すげえよあんた！ 達人だ！」

(おお、やつぱり褒められた。久しぶりに讃えられるのは気持ちいいな。くつくつく)

「いや、達人だなんて。そこまでじゃないですよ」

セバルトは調子に乗って続ける。

「うーん、たしかに言い過ぎたかもな。言うほどたいしたことないな」

渋い顔をしたのは、リーダー格らしい男だった。

「えっ……ちよつといきなり話が違います」

虚を衝かれたセバルトが口を滑らせてしまう。すると、リーダー格の男は豪快に笑い出した。

「ははは、あんたなかなか面白いな。強くて面白い奴に会えた上に命も助かるなんて、今日は運が  
いい」

「ふふふ、そういうあなたはなかなか人が悪いですね」

セバルトも釣られて笑う。

どうやら彼は悪い人ではなさそうだ。これは、質問するいいチャンス。

「僕は今旅をしている身なのですが、ここで人間に……あなた方に会えたということは、近くに町  
などがあるということでしょうか」

「ああ。すぐ近くに、エイリアっていう町がある」

「そうだ、まだ名前も聞いてなかったな。俺はイーニー・ノインって言うんだが、あんたは？」

「僕はセバルト・リーツと言います。よろしくお願ひします」

しばらく歩いてから、セバルト達は思い出したように自己紹介をしあった。

町への案内をセバルトが頼むと、男は快く了承したので、怪我人には応急処置をして、エイリアという町へと現在向かっている。セバルトはスキップしそうになるのを抑えながら……しかし、微妙に抑えきれず跳ねるような軽い足取りで歩いていた。

森を回り込むようにゆったりと曲がった道を歩いて行くと、やがて多くの建物が建ち並ぶ町並みが姿をあらわす。

「あれがエイリアだ」

「思ったよりはやく着いて助かりました。……そうだ、この地理についてももう少しかがつてもよろしいですか」

近づく町を眺めながら、セバルトはここはどういう場所なのか、などを尋ねる。

イーニーからの答えで、エイリアはネウシストーの東部に位置する町だとわかった。エイリアという町をセバルトは知らなかったのだが、ネウシストーはもちろんセバルトも知っている。自分の出身国を知らないはずがない。

とりあえずは自分の故郷の国であるということにセバルトはほっと一息をついた。

しかし、それと同時に違和感を一つ覚える。

この国に、魔軍との熾烈な争いに巻き込まれていなかった町があるだろうか。

トロールなどよりはるかに強大で凶悪な魔物達が、少し前まで攻勢を仕掛けていたはずなのだ。それなのに、トロールを倒したくらいで大げさに驚いていたのはやはり腑に落ちない。

そんな疑問を感じているうちに、エイリアの町中へと到着した。

そこでもさらに不思議な点が増える。どこの町にもあった見張り塔が見当たらない。その代わり

というように、石材が何層にも積みあげられているモニュメントが町の入り口付近に建っている。その前でセバルトは足を止めた。

「イーニーさん、これは一体？」

尋ねつつ、モニュメントを見つめると、台座のところに文字が書かれているのに気付く。どうやらモニュメントの説明らしい。さっと目を通す。

『英雄の塔』 マナフ暦466年製作。

このモニュメントは、たった一人で魔軍と戦い世界を救った英雄を讃えて——』

「え……何……？」

セバルトは言葉を失った。

二度と帰らないことを覚悟した魔軍との二度目の戦いの旅にでたのが420年。それから十度の夏と冬をこえ、全ての魔王、そして魔王達を統べる魔神を倒した。

(だから今は、430年のはず。それなのに466年製作？ バカな、そんなはずは——)

全ての思考が停止した一秒後、感じていた違和感が氷解していく。

「まさか……まさかこは。イーニーさん！ 今日の年月日は!？」

「日付？ ははっ、旅人だつつつてもどれだけ人里を離れてたんだよ、お前さん。今日はマナフ暦760年5月12日だ。よく覚えておけよ」

セバルトの手がだらりと体の脇に下がる。

……もう、間違いなかった。

魔神との戦いによるかつてないエネルギーの衝突が空間を歪ませ、この場所までセバルトを移動

させた。それだけに留まらず、時間すらも歪めて、時を超えてこの時代までセバルトを移動させた。セバルトは300年後の未来へとやってきたのだ。

★

我を失っていたのは一瞬だった。魔物と戦い続けて身についた性質<sup>たち</sup>で、幸か不幸かセバルトは動揺を引きずらないようになっていた。

まず思ったのは、これからどうすべきかということ。

セバルトは様々な魔法を使うことができ、また目にしてきた。色々な道具や、伝説の武器なども目にしてきた。だが、時を超えるような物は一つも知らない。

だから自分が元いた時代にすぐに戻るといふことは、少なくとも難しいと結論づける。

それならば、ともかく今この状態での無事と安全を図るのが最善だろう。

考えをまとめると、ザワついていた心も落ち着いてきた。

「どうかしたのか？ 何か考えてるみたいだが」

「……いえ、思っていたよりも日にちが過ぎていたのだな、と少しばかり驚いたんです」

「そうか。それにしても本当にいいのか？ 何も報酬がいらなんぞ」

「すでももらいました。このあたりの情報という、旅をしている僕にとつてはお金よりもはるかに価値のある物を」

セバルトが笑顔を作ると、イーニーは頭をかきながら息をついた。先ほどから何度か繰り返して





いるやりとりだが、ようやく納得したようだ。

「まあ、そうだな。あんだけ軽くトロール達をいなしてたくらいだ、お前さんにとっちゃ全然大したことがないんだろう。通りすがりの旅人に一応冒険者ギルドでバリバリやってる俺達が全然及ばないなんて、もっと訓練しなさいってことだな、お前さんを見習って。とにかく今回のこと、ありがたく言葉に甘えさせてもらおう。恩に着るぜ、セバルト。それじゃあ、またな！」

握手を交わして、セバルトはイーニー達と別れた。

それからセバルトはイーニーから聞いた情報を元にまずは宿へと向かっていたが、久しぶりに見る街並みに、いったん沈みかけた心は浮き上がり始める。

人間が住む街。それが自分の知らない場所で自分の知らない時代だとしても、深く暗い樹海が広がる魔物達の領域へ踏み込んで久しかったセバルトにとっては楽園だ。

そう、ここが未来であれなんであれ、ようやく苦難と戦いの旅が終わった。となれば、何はともあれまず望むのは平穏。平和が訪れた世界で、自分も平和に体と心をゆつくりさせる休暇を取るのだ。

「静かで屋根のある寝床が欲しいね。よし、行こう」

長い長い野宿が続いたのだから、宿に泊まってベッドで眠れるということがどれほど素晴らしいことか。想像するだけで気持ちよく眠れそうなほどだ。

ベッドの上でごろごろと転がり、最高の気分ですわんこくるまる。部屋には小さいけれど柵やテールブルがあつて、屋根もあり、そこで静かに過ごす。

そんな宿の一時を想像しただけでうきうきしてきちゃうね、とセバルトは町の中を、軽い足取

りで宿へと向かいはじめた。なかなかセバルトは切り替えが早いのであった。

かなり長い時間が経っているが、エイリアは、セバルトが知るネウシントー国によくあった町並みからそこまで大きな変化は見られない。

木造の建物が多く並び、場所によって住宅が多い場所や店舗が多い場所などおおまかに自然に棲み分けられている。店舗の方が少し派手な色の屋根が多い。

並ぶ建物をはじめとして他にも目につく物の多くは、デザインは多少異なっているが、これなら違和感なくなじめそうと思える物だ。

店舗が並ぶ通りには雑踏の賑やかさがあるが、住宅が多い場所は静か。欠けた木の塀に気をとられていると、手に小さな鞆をもった子供がそばを駆け抜けていった。それと並んで、尻尾の丸い犬も走っている。のどかな光景にセバルトもほっこりする。

とその時、セバルトは重要なことを思い出し、空間魔法『不可視の玉壺』を使用した。

何も無い空間に穴を開け、品物を収納し持ち運ぶことができるという魔法である。長旅においては、持ち運びたい物がたくさんあるので非常に重宝した。

セバルトはそこから鏡を一枚取り出し、銀色の鏡面をのぞき込む。

「……ふう、よかった」

セバルトは胸を撫で下ろした。

長い時間が経っているということを知って、自分も年をとってないかと心配になったのだ。

だがそういうことはないようで一安心である。魔神との決戦時と特に変わらない男が鏡の中から

セバルトを見つめている。

邪魔にならない程度に適当に切られた銀髪は、時間が経過して長く伸びているということもない。顔つきはとくになんともない。セバルト自身は、どこにでもいそうな男だと思っている。特別老化はしていないなどほっと息をつき、鏡をしまうと再び宿屋へと足を向ける。

程なくしてごぢんまりとした安宿を見つけ、扉を勢いよく開いた。

もうベッドは目の前だ！

「なんだいこのお金？ どこか別の国の物かい？」

——セバルトが持っていたお金を見た、宿の主人の言葉だった。



「金もないのに泊まる気か。いい大人がオモチャの金を出すなんて何を考えている、そんなに厳つい顔してるくせに。もつと全うに生きろ。……って、なんでそこまで言われなきゃならないんだ！」

宿を出たセバルトは石ころを蹴<sup>ひ</sup>飛ばした。

300年も経てば、国で流通する貨幣の種類が変わるのは何もおかしくない。それを忘れて昔の通貨で支払おうとしたセバルトは、宿の主人にこつてりと嫌味を言われたのだ。

これが世界を救った男への仕打ちなのか？

必死に戦って世界を救ったのに金がなければこんな扱いか？ 許すまじ貨幣経済。

「それにしても……厳つい顔なんてしてるかな？ 自分では聖母のように穏やかだと思ってるんだ

けど……」

街角でセバルトは鏡を再度見た。言われるまでは特になんとも思わなかったが、よく見てみると……道を歩いている人と比べて客観的によくよく見てみると……目つきが悪いというか……無駄に眼光が鋭いというか……そのせいでちよつと怖い雰囲気があるというか……敵つい、かも……。

セバルトは肩を落とす。

（十年以上人里離れて戦い続けたら誰だつて険しい顔になるに決まつてるじゃないか、仕方ないだろ。これが世界を救つた男への仕打ちなのか？ 必死に戦つて世界を救つたのに顔が怖いとこんな扱いか？ 許すまじ貨幣経済）

貨幣経済へのはつちりである。

いい町だと思つたらこれだ、世の中油断ならない。と頭に來てはいるが、それより重大な事実がそこにあることにもちろん気が付いていた。現在の通貨を持っていないセバルトは、このままでは柔らかなベッドに潜り込むことができないどころか、パン一つ買えないということだ。

（くつ、俺としたことがこんな単純なことを見落としていたなんて、気が抜けたか。こんな注意方では何かあつた時生き残れない。……いや、そこまで引き締める必要はもうないのか）

セバルトの脳裏に、ふと昔のことが浮かんた。

故郷の町の近くに作ろうとしていた、喧噪ワザワザから逃れるための隠れ家。

（完成したあれがこの時代になればな。宿で悩む必要もないのに）

だがないのだから、今ここでなんとかしなくては、と道の端でセバルトは首をひねる。

お金がなければせつかくの町でも、宿どころかほとんどの物が利用できない。現代のお金を手に

入れる方法は――。

「そうだ、『不可視の玉壺』だ」

鏡を取り出した、『不可視の玉壺』の中身が健在だったのならば、話は早い。

あの中にはお金や鏡以外にも、昔手に入れたさまざまな物が入っているから、それを換金すれば現在の貨幣を生活に困らないくらいには手に入れられるはず。

そして、そのあてはすでに知っている。

イーニーから聞いた冒険者ギルドという場所だ。

冒険者ギルドは公私問わず依頼を受け、魔物や盗賊を退治し治安維持をしたり、難しい場所にある植物や鉱物をとったり、危険な場所の調査をしたりを仕事としている組織という話だった。それならば、魔物や獣を倒して得た素材などを換金するのに使える可能性は高いと推測できる。

イーニーはその冒険者ギルドを取り仕切り運営するギルド長であると聞いた。

善は急げと、早速セバルトは冒険者ギルドに向かった。

冒険者ギルドは、外観は特になんの変哲もない酒場のような木造の建物である。その建て付けの悪いドアをセバルトが音を立てながら開けて中に入ると、ちょうど手隙のタイミングだったのか人は二人しかいなかった。

入ったところはロビーになっていて、仲間内で打ち合わせができそうな小さなテーブルがいくつもあるが、そこは誰も利用していない。奥には窓口が二つあり、おそらくそこで色々な手続きを行うのだろう、片方にはイーニーが、もう片方には眼鏡をかけた女性がいる。つまりいるのは職員だ

けということだ。

「おう、セバルトじゃないか。早速来てくれたか」

入るやいなや、イーニーがからっとした声で手を上げ、笑顔で出迎えた。

「旅の途中で手に入れた物を換金したいと思ひまして。珍しい植物や鉱物、それに魔物からとれる素材なんかもあるんです。ここで、そういう物の換金ができるのではないかと思つたのですけれど……できますか」

「もちろんできるぜ。隣の窓口でやってくれ。メモット、この人がさっき話してた旅人だ」

「セバルトさんですよ。ギルド長を助けてくださつてありがとうございます。私はメモットと言います」

眼鏡をかけた女が頭を下げる。

「トロールが出たんですよ。本当最近物騒ですね、どうしちゃったんでしょう。南の荒野で突然溶岩が湧いたなんて妙な天変地異まで起きたらいいです。賢者様もこの前、調査するつもりだと言つてましたけど……と、お待たせしてましたね、すみません。さき、どうぞどうぞ。いい素材、待つてますよ」

メモットと呼ばれた窓口の女性は目を輝かせ、セバルトに向かって両手でこつちにこいこいとジュエスチャをする。気を取り直し、素材をのせる台の前に移動したメモットの隣にセバルトは行き、「とりあえず……これくらい、ですね」

あまり強すぎない魔物の素材を次々と台の上に置いていく。

このくらいなら驚かせすぎないだろうというレベルの物だったが……次の瞬間、気楽に笑つてい

たメモットの表情が一変し、顔中が驚愕きょうがくに塗りつぶされた。

「ちよ、ちよっと待ってください!」

引きつった声を上げると、後ろにある棚から分厚い本を取り出し、台の上の素材と本の中身を見比べながらさらに驚きを深めていく。

「なんでですかこの素材は! 凄い素材があるじゃないですか! クリーピングゲイズの目玉にサラマンドラの燃舌、リッチのフード……こんなの凶鑑むかみでしか見たことがないですよ! セバルトさん、あなた何者なんですか!? どうやってこんな物を!」

メモットが驚愕と好奇と畏怖いふが混ざった声で尋ねる。

予想よりずっと大きい反応にセバルトは慌てて取り繕うための言葉を考える。

「ええと、いえ、そんなに! ……そんなに大した物じゃないんですよ。旅の途中にたまたま、本当に偶然そういう魔物と出会ってしまつて、ちょうど魔物同士の争いで弱つてたみたいで、そこを漁夫の利で運良く倒せただけなんです。長旅をしているとそんな場面もあつて……倒せる人も多少はいるんですよ? だからあまりお気になさらず」

「いやいや、気になりますよ。それにしても凄いですね。漁夫の利でもなんでもこんな魔物とやり合えるなんて、見てみたかったなあ。生の魔物も。戦うところも。は〜」

メモットはうつとりに息を吐きながら、素材とセバルトに熱い視線を向ける。

「うっ……これは」

セバルトの体が固まつた。

夢中になっているメモットはセバルトの動揺にも気付かず、体がくつついていることにも気付か



ず、「おー」「ほー」「すごいです」と感心しているが、セバルトが固まった理由はそのメモットだった。彼女が胸元が開いた服を着ていたからだ。

密着され至近距離で柔らかそうな肌や浮き出る鎖骨を目にしたセバルトは、つい素肌に目がいつてしまう。

300年前にはこんなに肌があらわな服なんて着ている人はいなかった。必要性のある時以外は皆もつと肌を隠していたのに、長い時の流れの中でこういう格好をするようになったというのか。（むむむ……この時代の若い者は何を考えているのか……まったくもってけしからん！ こんなに無駄に開放的な格好をするなんて！ 本当にけしからんな！ ……ちら）

心の声と裏腹にセバルトはメモットの開かれた胸元に視線を走らせる。まったくけしからん胸だよこれは本当に。

「どうかしましたか？ 固まってますけど」

「あいっ！」

メモットに声をかけられ、セバルトの返事が裏返った。

「どうしたんだ？ いきなり妙な叫びを上げて」

「え？ い、いやあ、別に。ちょっと最近の若者について考えてぼーっとしてたのです」

「おっさんくさいこと考えてるな、お前さん」

（うるせー、イーニーだっておっさんだろうが。ずっと一人でいたから人肌に慣れてないんだよ）と内心では思ったが、やぶ蛇になりそうなので何も言えない。

実際のところは、メモットはそう過激な服装をしているわけではない。胸元もたいして開かれて

いるわけでなく、角度的なものもあって見えやすいだけだった。むしろセバルトのいた時代が、これまでのネウシストーリーの歴史の中でも、肌をなるべく見せない服が流行していた時代なのである。

「メモットさん、それより換金は？」

セバルトは話を無理矢理戻す。

「え、えーとですねえ。うーん……」

メモットは眼鏡の位置を直しながら唸る。

「どうしましょう、こんなものすごい素材をうちに持ってきた人がいないので、値段のつけようがないんです。基準がないんですよ。なので、ちよつと時間がかかりそうです」

「そうなんですか、少しくらい大丈夫ですよ」

「いえー、待ってもらうにしても時間がかかりすぎちゃうかもな……。あのう、セバルトさん、前例がない物なので、少しくらいどころか、ちよつとやそつと待ってもらうのではすまなそうなんですけれど」

メモットが様子をおかがうような上目遣いでそう言った。

困ったなとセバルトは数瞬考えて、

「それなら、とりあえず一部だけでもいただけないでしょうか。おおざっぱな見込みの五分の一くらいでもいいので。それで正式に価格が決まったら、その時に残りの分をお願いするという形で。もちろん渡しすぎたということでしたら、その時にお返しします」

現金のないセバルトにとつては、とにもかくにも当座を凌ぐ金が必要だ。

「そうですねえ……」

「まあ、それでいいんじゃないか。二、三十分で答えが出そうな雰囲気でもないしな、おまえの眉間のしわ的に」

考え込むメモットに、イーニーが声をかける。

「私のおでこはゆで卵並みなのが自慢なんですから、変なこと言わないでください」

メモットは額に手を当てて、むうと口をとがらせた。

「賢者様ならなんでも知ってそうだけど、忙しそうだし、すぐには無理かなあ。うーん。……そうですね、ギルド長の言うとおり、やっぱり時間はかかりそうです。わかりました、セバルトさん、おおよその金額をおわたししますので、こちらへどうぞ」

と再び両手で手招きをした。

セバルトがメモットの隣へ行くと、イーニーが親指をぐつとあげる。配慮してくれたらしい。さすがギルド長、気配りもできていい人だ、とセバルトは感謝する。

少しのやりとりの後、セバルトは20万ラケイアを得た。

これまでに集めた情報によると、一人で暮らすなら二ヶ月程度はなんとかなりそうな金額だ。

もともと、家も何もない状態のセバルトでは生活費はもつとかかるだろうけど、それでもとりあえずしばらくは問題なし。

これで用事は済んだので、冒険者ギルドを出ることにしよう。

ちようどセバルトがそう思った時だった。

誰かが床をききませながら近づいてきた。

「見ない顔だが、新人か？」

ギルドに入ってきた冒険者の男女二人組が声をかけてきた。

豊かな顎髭あごひげの男冒険者にイーニーが言う。

「ああ。こいつはセバルト。旅人なんだが、方々を旅してるだけあって結構色々知ってたり持ったりするみたいだぞ。お前さん達はこれからホーンモールの討伐だろう。アドバイスでももらったらどうだ？」

男冒険者は笑いながら首を振った。

「ははは、俺達の腕も十分だぜ。ホーンモールくらいなら余裕だ」

「アドバイスというほどのものじゃないですけど、レガティの花をここに来る途中見ました。もう調べてあるかもしれませんが、群生しているところは——」

セバルトは、持っていた少し黄ばんだ紙にメモ書きをしていく。

レガティの花をモール種の魔物は好むので、巣穴が近くにあることが多い。知っていれば、仕事が多く済むし不意に襲われることも少なくなる。

だが、豊かな顎髭の男冒険者も、コンピらしい魔女帽子の女冒険者も一様にぼかんとしていた。

「レガティの花？」

「なんで花なんて気にするんだ？ あっはっは、お前さんロマンチストだな」

顎髭が大きく口を開けて笑う横では、魔女帽子が不思議そうな目をしている。

「ロマンじゃないんですか……」

セバルトは事情を説明するが、顎髭は疑うような目を向ける。

「なに？ 本当か？ 俺は結構このギルドでやってきてるが知らねえぞ。だいたい旅してるだけ

で、魔物に関しちゃ俺の方がキャリアは長いはずだ」

「でも、聞いて損はないじゃない。注意しておけばいいって」

魔女帽子が言う。

「ええ。準備は大事です。腕前よりも注意と知識の方が大事なくらい」

「そうかあ？ 俺は結構な腕前なんだぜ？」

ぐははと得意げに髭を撫でる男冒険者。セバルトは小さくため息をついて、男の装備を指さした。

「ふう。……盾が傷んでいますよ。それで行くのは危険です」

「ん？ ああ、これか。別にたいしたこたねえよ。ちよつと傷がいつてるだけだ。お前さん、神経質すぎねえか？」

「でしたら、軽く叩いてみてもいいですか？ 問題ないというなら」

「ふん、何を言うかと思えば。ああ、やってみな。割れでもしたら、心配性の旅人さんが言ってた花のことも信じてやろう」

セバルトは盾の中央からやや右上にある小さな傷をコンコンと確かめるように軽く指で叩くと、テーブルの上にあったスプーンを手に取り、そこに向かって角度をつけて一つ叩いた。

瞬間、ひびが盾全体に広がり、バラバラと表面が崩れ穴が空く。

ギルド内の者達が一斉に息を呑むなか、セバルトがこともなげに言った。

「これが魔物の爪でなくてよかったですね」

「な……な、何をした？ そんなもんで軽く叩いただけで盾が壊れるなんて、ありえねえ！」

「ここを叩けば簡単に石が割れるポイント、石目というものがあります。これは石に限らず、何物

にも弱い場所というものがあって、そこを的確につけば硬い物でも容易に壊せるし、壊される。そのような弱点はカバーされていることが多いですが、使い込むうちに弱点が露わになることがあるのです、その盾のようにね」

セバルトは穴の空いた盾を指さす。

「ちゃんと手入れをしていなかったのではないですか。旅も討伐も、事前の調査や準備が何より大切です。それがいざという時に薄皮一枚で生死をわける」

「う……」

「わあ、すごいっ！ もの凄く詳しいじゃないですか」

ばつの悪そうな顎髭を押しつけ、魔女帽子がセバルトの前に飛び出してくる。セバルトが話している間、体をうずうずさせて聞き入っていたのだ。

「言う通りだと思います、天才的な洞察力ですね！ 私の弱点も見抜かれちゃいます！」

「さすがに天才的はちよつと言い過ぎだと思いません」

「そんなことはないですよ。私達、全然気付かなかったもん。準備が大事かー」

イーニーがカウンターから出てきて、顎髭の冒険者に鋭い視線を送る。

「九割勝てる勝負でも百回やれば十回負けちまうわけだしな。できる限り事前になんとかするってのは何回もやることなら当然かもしれん。俺達は平和ボケしすぎてるのかもな。魔物に負けたら次があるかどうかからんし、最近の情勢に対応しきれないってことだ。わかったらう」

「あ、ああ。……そうだな。こんなの見せられたら、わかるしかねえ」

顎髭は、割れた盾に目をやり冷や汗を流している。自慢の盾だったのかなとセバルトは思った。

「修理のお金はお支払いします。僕が勝手にやったことですから」

「ダメダメ！ 命が危ないところを助けてくれたんだから。ね！」

「ああ。そもそも、俺がやってみろって言ったからな。それと、スプーンで盾をぶっ壊すなんて芸当見せてもらった代金だ。はは、いい授業料だ……あんた、本当に半端じゃねえな」

悟ったように顎髭が苦笑いすると、魔女帽子がセバルトに思い切り近づいてきた。

「それにしてもすごいねえ！ レガティの花のこととか、石目のこととか、全然知らなかったよ！ 色々見てきた旅人さんって話は伊達じゃないみたい。ねえねえ他にもなにかアドバイスとかある？」

それからしばらく、セバルトはその冒険者パーティからあれこれ相談をされたのだった。

冒険者パーティからの相談を受け終えたセバルトは、今度こそイーニーと冒険者達に別れを告げ、冒険者ギルドを後にした。

そして、換金した金を握りしめて向かうは、もちろん先ほどの宿屋だ。

「僕はちゃんとお金は持っています。ほら！」

宿屋のカウンターに手にしたばかりの『今の』貨幣を叩きつけた。

三ヶ月泊まれるほどの結構な金額に、宿屋の主人は目を輝かせへつらいの笑みを浮かべた。

「なんだなんだ、持つてるじゃないですか旦那あ。先ほどはからかって人が悪い」

「旅をしているので、この地で使える通貨を間違えただけです。……この地の金も持つてはいるが払うとはまだ言ってませんよ？」

意地悪く言うど、宿の主人は頭が膝につきそうなくらいに腰を折り曲げた。

「そ、そうだったのですか。大変申し訳ありませんでした。この通り、この通りですから、どうかこの『赤土亭』にご宿泊を！ 何卒、何卒！ 泊まらないなんて言わずに。へへへ」

平身低頭頼む主人を見て多少溜飲を下げたセバルトは、二週間分の金額をカウンターに残し、残りをしまった。

「とりあえずはこれで。二週間後に更新するかは決めます」

「へへっ、ありがとうございます！ それではお部屋にどうぞ！」

俄然腰が低くなった主人に案内され、セバルトは寢床を確保した。

安い宿だけあつて、部屋にあるのは粗末なベッドと、台と椅子一つだけ。

「それでも屋根があるだけ十分だな。よし！」

セバルトは顔いっぱいの笑みで、粗末なベッドに勢いよくダイブした。



大陸の果て、魔領の最奥。

闇深き岩の社に、咆哮がこだまする。

「これで終わりだ！ 魔神！」

「舐めるな人間！ 我が貴様ごときに敗北すると思うか！」

咆哮をあげた片方は、英雄。



これまでたった一人で魔軍との戦いの旅を続け、七人の魔王を倒してきた人類の希望。もう片方は、魔神。

七人の魔王を生み出し、人類を脅かしていた魔軍の真の支配者。

人と魔、ともに最大の戦力が繰り広げた戦いは、今決着の時を迎えようとしていた。互いに握りしめた武器に自らの力を込める。

魔神は手にした杖つえに、英雄は握った剣に。

両者の最後の一撃がぶつかりあい、すさまじいエネルギーの奔流がほとぼしる。閃光せんこうと轟音ごうおんが巻き起こり——立っていたのは、英雄だった。

黒い杖をもった魔神は地に伏し、闇にとけるようにその体は消滅していった。

英雄は息を荒らげながら、その様子をじっと見届ける。

勝った。

これで、すべての魔を滅ぼした。

長きにわたる戦いの日々は終わりを迎えた。

自分の使命は果たされ、世界に平和が訪れる。

英雄がそう安堵あんどした瞬間だった。

「なんだ!？」

突如、世界がゆがみ始めた。

景色がひしゃげ、閉ざされた空が虹色にじいろに変化していく。

風の唸る音が四方から響き、天地の感覚が曖昧あいまいになる。

すべてが圧縮され、引き延ばされ、回転する——そんな未知の感覚に襲われた直後、英雄は意識を失った。

マナフ暦430年11月23日。

その日、世界から英雄は失われた。

最初の魔王——一度目の旅をした時は、魔物を率いて人間を滅ぼそうとする魔王が全ての諸悪の根源で、当然それは一人だけだと思っていた——を倒して凱旋がいせんした後に得たものはいいことばかりではなかった。

——セバルトって、首都で表彰されて市長の屋敷にも招かれたんだろ？　うちが作ってる道具を市で採用するよう頼んでくれよ。国を救った英雄の頼みなら聞いてくれるだろ。

——いや、そういうのはちよつとまずいでしょ。無理だつて。

——ああ、そう、俺みたいな庶民の頼みは聞けないつてことか。お高くとまりやがつて。

——蔵を整理するのやつてくれない？　重い物が多いから。

——もう最近ずっと方々から呼ばれてて、ようやく今日一日だけ休みが取れたんだ。

——魔物を倒せるくらい力があるんだから物を運ぶくらい簡単でしょう？　やつてくれたつていいじゃない。

名前を利用して宣伝をもくろむ商人から歓待を受けたこともある。魔物との戦いでは自分のところの道具を使ったと言ったださいと袖の下を差し出され、使つてないのにそんなことは言えないと断ると、これじゃ足りないっていうのか、強欲な奴めと罵られた。

その他にも、美女や評議員や知人や、色々なところで似たようなことがあった。宣伝、口利き、魔物退治、力仕事、できると一度思われると軽々しく色々頼まれる。全てを受けることなどできるはずもないのに、断れば陰に陽に罵られることも少なくない。

もちろん、讃えてくれる人、ねぎらってくれる人、感謝してくれる人、尊敬してくれる人、心配してくれる人、そういう人も多くいた。

でも、だからといって嫌な思いが消えてなくなるといわけでもない。

だからこそ、魔王が一人ではなく複数存在していることがわかり、魔軍の再侵攻が始まった時、そんな暮らしに疲れていたセバルトは、人々を救うため、人々から逃れるため、再び旅立つことを決めたのだ。

そして——今度は十年もの間、魔物の闊歩する魔領の厳しい旅をし、魔王と魔神を倒し尽くし、この時代にやってきたのだ。

「ようやく、解放された」

軽く目を瞑っていたセバルトはベッドの上で呟くと、体をバネにして勢いよく跳ね起きる。

「よっし、まだ夜まで時間はあるし、解放された世界を見てみようかな」  
セバルトは宿を出て町を見物しはじめた。

町中の光景は、ほのぼのとしたものだ。こちらもそこまで300年前と変わってはいない。

果物が入った箱を軒先に並べた青果店や、雑貨屋、砂糖菓子を売っている屋台などが並ぶ通りの賑わいのなかを、セバルトは一步一步踏みしめるように歩いている。

（ああ、いいな。人の声が聞こえるところは。甘い匂いがしてるし、色とりどりの果物はきれいだ）

魔物や獣が蠢く森を荒野をと旅をしてきたセバルトにとって、人の営みがある町というのは、それだけでも魅力的だった。

（その上、このエイリアに並ぶ建物は、華美ではないけど安心する造りをしている。これは自分が生まれ育った国だからかもしれないけれど、しばらくここに滞在するのは悪くない）

以前よりも落ちていて、町の色々などころを見てみると、水道が結構整っていることや、その結果公衆浴場がいくつか町にあること。赤や緑などかわいらしく明るい色の屋根が結構あること、ガラスの窓のある建物が一般にも広まっていることなど、昔のネウシントーの一般的な町ではあまりなかったものにも気付く。それらも魅力的だし、街並みはきれいだし、なかなか快適そうだ。

ランプもたくさんあるので、夜に歩けば、数多くの灯が灯るはずだ。油のランプもあるが、魔法によって光を照らすマジックアイテムが多い。昔より、夜は明るく、町も人も清潔で、暮らしやすくなっていることだろう。

「好きな雰囲気だ」

目に留まった店から果物を購入する。早速小ぶりながら真っ赤に熟したリンゴを噛ると、ふわっと爽やかな香りが広がり、甘酸っぱい果汁が溢れる。

これはうまい、とリンゴを噛っていくと、あつという間に腹の中に収まった。

(……誰か見ているな)

すっかり満足したセバルトだったが、少し前から視線を感じていた。だが今は街歩きを優先したい。用事があるなら向こうからアクションしてくるだろうと気にせず、それからも早速手に入れた現在のお金でウキウキと買い食いをした。

物欲しそうな小鳥にリングの欠片をあげつつ腹ごしらえをすると、町の外へと出てみる。そして町の周りをぶらつくと、周囲の環境もいいものだ と確信した。

町の西と南には街道がのび、荷物を背負い歩いている人の姿を見ることが出来る。その周囲は草原や荒野になっている。

町の北に連なる山々は濃い緑に覆われた優雅な稜線りょうせんを誇り、東にある大きな湖は透き通った水をたたえ、水鳥が泳ぐほのぼのした姿を見られる。いずれの周囲にも大きな森が広がり、獣や果実、木材の恵みを与えている。

いくつもある森の一つ、鳥の声が聞こえる湖の近くの森の中に入って深呼吸をしてみると、木々の匂いが体中を満たす。

魔領のすえた臭いのする森とは違う爽やかな空気だ。

(故郷の森と同じ匂いだ)

エイリアよりも小さいが、似たような山や森に囲まれた静かな町だった。

自分が生まれ育った小さな町にセバルトは思いを馳せつつ、ゆつくりと歩を進める。動物や虫の他に、散歩をしている人などもいて、地元の人にとつても馴染みの森のようだ。

やがて木々の合間からセバルトが見つけたのは、一つの木造の小屋。

——瞬間、胸の奥が鈍く痛んだ。

崩れ朽ちた小屋が脳裏に浮かぶ。

旅の途中、何度も見た夢だ。過去でついに果たせなかった夢だ。

第一の魔王を討伐し、英雄として凱旋したセバルトを待っていたのは、素晴らしい歓待と、あらゆる所が英雄を招いて行おうとする様々な行事だった。元々小さな町で慎ましく暮らしていたセバルトには、それは少し賑やかすぎた。

静かに暮らす方が性に合っていたし、その賑やかさには好ましくないものもあった。

それに疲れたセバルトは、故郷の村の近くの森に、喧噪けんそうから逃れるための隠れ家を作ろうとした。魔王を倒すための旅をする中で手に入れた、あるいは褒美として与えられた、様々な宝や品物。苦難を乗り越えた英雄の証明を存分に使って快適な、最高の、そして誰にも知られず静かに暮らせる、自分が自分の好きなようにあることができる場所を作ろうとした。

しかし、それは叶かなわなかった。作り始めて少しのところ、首都へ行かざるを得なくなつた。英雄を求める善良な人々から願われると、当時のセバルトは強く断りきれなかつたのだ。そして結局、長期間隠れ家を放置することになり、ちゃんと整備しきつていなかつた小屋は、獣に荒らされ、雨漏りをし、床板や壁板も腐って見る影もなくなつてしまつた。

その時の光景は目に焼き付いている。少しずつ作り上げてきた隠れ家が——庭木は折れ、果実が踏みつぶされていた。屋根に穴が空き、雨水が床板を濡らし腐らせていた。棚は倒され、椅子の脚は折れ、部屋の隅には嚙かられ破られた袋から、穀物がこぼれ落ちていた——悲惨な有様だった。

そして修繕する間も、理想の隠れ家を利用することもなく、出現した新たな魔神、魔王、魔軍

を倒すため、セバルトは二度目の旅に出ざるを得なくなったのだった。

でも。

「ここでも見られる」

目の前にある建物は、大きくはないが、小屋の形は保っている。人の気配はなく、中を覗いてみると何も物がない。どうやら使われてはいないようだ。

セバルトは小屋に熱い視線を注ぐ。

「やり直せるかもしれない」

昔夢見たことを。今度こそ。誰にも邪魔されず。

今思えば、自分をもっと優先して構わなかったとセバルトは思っている。世界を救ったのだから……仮にそうじゃなかったとしても、もう少しくらいは優先してもいいはずだ。

（この時代では誰も自分を知らない。なんの重荷もない。これはチャンスだ。これまでハードに生きてきた分、これからは違う生き方をしたい）

苦難を乗り越え手にしたものを存分に使って、快適な、最高な、そして誰にも知られず静かに生きられる、自分が自分の好きなようにあることができる場所——。

故郷に似た町に300年後の今たどり着いたのは、そういうことなのかもしれない。

昔果たせなかったことを、やり直す。

今ここで。もう一度。



「これまでの逆。これまでの苦勞の分、なんでもできる快適な最高の隠れ家を作つて思うがままに満喫する。もちろん、のんびりと安全安心に、英雄としての力は知られないようお忍びで、スローライフを送るための城を作る！」

それが、全ての魔王を滅ぼし世界を平和にしたセバルトの望み。命がけのサバイバルも、英雄の重荷も、もうごめんだ。この機会に人生を一新するのだ。

決意したセバルトは町を歩きまわり、冒険者ギルドや泊まっている宿などで聞き込みを行った。その結果、翌日には小屋の持ち主が見つかった。交渉をすると、どうせ使っていないしほろいし、と言つてあっさり売ることを了承してくれた。しかもかなりお安く。

早速セバルトは冒険者ギルドに行った。メモットが相当頑張つてやつてくれたらしく、昨日頼んだ査定が終わつていたので換金の残り金額を受け取り、また追加で道具や薬草やその他素材を売つて、お金を工面した。

小屋の金額が思つたよりも安くあがつたこともあり、それで十分まかなうことができ、さらにこの先必要なものがある程度揃えるのに必要なだけの金額も残つた。蓄えてきたものはたくさんあるが、とつておきたい貴重品もあるので、今後はもっと節約していかなければならない。

(今回は、後々のための必要経費、許される。さて、どうしてやろうかな)

ともかくセバルトは、自らのものとなつたエイリア東の森にある小屋へと、再びやつて来た。



汚れた小屋を見て、ここから始まるのだとあらためて思う。

町中の喧噪を離れ、一人静かに過ごす場所。いいじゃないか、隠れ家。

(……でも、よく考えると、別にこの時代では英雄と知られて騒がれてるわけじゃないんだから、隠れる必要はないのか？ まあ、でも、自由で快適でのんびり過ごせる場所を目指すのだし、昔作れなかったものを今こそつてことだし、隠れ家と俺は呼ぼう。こういうのは気持ちの問題だ)

自分のものになったことだし、堂々と建物の中に入る。軽く中を一周すると、当たり前だが、見事にすっからかんだ。何も使えそうなものは残っていない。

「いや、埃ほこりだけはたつぷり残ってるな。まずは掃除からか」

何ほともあれ、きれいにしなければ使えないということ、大掃除から始めることにした。セバルトは不可視の玉壺ぎよくちから布切れと水の入った蓋付きふたつの器を取り出した。

この形なき魔法の壺の中には、売るための素材だけでなく、旅に使ったものをはじめとして色々なものが入っている。

食料、水、油、調味料、鍋なべ、紙、ペン、水筒、薬草、ポーション、棒、糸、衣服、杖つえ、ナイフ、お金、靴、コップ、網やその他諸々、旅立つ時に用意したり、途中で補給した旅に使う様々な道具。色々な人が、旅に出る際には品物を渡してくれたので、これでも減らしたほどだった。自分の商会で扱っているものを英雄に使ってもらえばいい宣伝になると思つてのことだ。

そしてまた、旅の戦利品や、帰ったあとや旅の途中に使うつもりで保存した素材なども入っている。つまりデーモンの翼などの魔物の体からとれる素材。龍樹のようなレアな植物や鉱物。聖剣や神器など旅の途中で見つけた宝物やマジックアイテム。

その中でも価値の高いものは、精霊の鏡、魔力を喰らう聖剣、成長促進装置、料理をいつまでも温かく保つテーブルクロス、羽虫避け、自動人形の宝玉、魔法石板、ポケット氷室、などなど。

これらが魔法によって作られた特殊な空間に収納されている。過去から突然やってきてしまったセバルトが持っている唯一の資産だ。

これは大事に使っていかねければならないし、これら過去から持ってきた道具を利用すれば、この時代で快適な暮らしをするのにいろいろと役立つはずだ。

「とりあえずはのんびり掃除に役立てますかねー」

布切れを水で濡らし、洗浄効果のある灰を使って家の中を磨いていく。くすんだ色彩だった建物が徐々につややかになっていく様子を見ると、別段楽しい作業というわけでもないのに、なぜか段々夢中になっていく。

黙々と作業をするうちに、昼をまわった。

セバルトは壁板をこすった指を、目の前に持っていく。

「よし、汚れ無し」

ぴかぴかになった小屋を見回し、セバルトはやりきった笑顔を見せる。

少なくとも目につくところはかなりきれいになった。

そうしたら、次は外である。この小屋近辺の約二十メートル（m）四方の土地も一緒に買い取ったので、庭も造れる。

現状は雑草が伸び放題で、木々も好き勝手に生えている。庭なんてものはないし、森の片隅に肩身を狭くして小屋が建っている有様だ。

まずはこれをちゃんと使える土地にしなければならぬ。

しかし、20m四方の広さにびっしりと生える、腰くらいまである草や、背丈よりもずっと高い、ねじれた枝の木々を切り倒すのは容易ではない。それだけでかなりの時間がかかるだろう。一人で普通に刈っていくのでは数日はかかりそうだ。普通にやれば、だが。

「英雄として手に入れたものを遠慮なく使わせてもらおうか。まずはこの、力を」

セバルトは精神を集中し、手のひらを天に向ける。

『ウインド・ブリーズ』

セバルトが魔法を発動させると、手のひらの上で空気が刃と変じて渦巻く。

それを一気に解放すると、暴風が吹き荒れるような大きな音とともに、透明な刃が周囲を切り刻んでいく。数十秒後、小屋の周りにあった木も草も根こそぎ千切れ、吹き飛び、小屋を中心に同心円状に平らにならされた地面が現れた。

もちろん、小屋は避けるように魔法を操ることくらいセバルトにとってはお茶の子さいさいだ。なにせ、魔王や魔神と戦って来たのだから。

「よし。整地完了」

これで、庭でなんでもできる準備が整った。好きな植物を植えてもいいし、何かを建ててもいいし、置いてもいい。

(何しようかな。果物の木を植えてもいいし、花を植えてもいい。石を並べるってのも悪くないな。北の地ではそんな洒落た庭を造っていた部族がいた。菜園を作って何か育てるのも悪くない。ああ、夢が広がるなあ。くっくっく)

セバルトは整地された土地と掃除された小屋を眺め、ほくそ笑む。

「なに、今の音？ うわっ、何これ！ 凄いことになってる！」

その時だった。

女の声が小屋を挟んで反対側から聞こえてきたのは。

驚き呆れたような声はさらに続く。

「信じられない……凄い破壊。大鎌で薙ぎ払ったみたい。魔法にしてもこんでもない威力ね。でも人間業……には見えないなあ。自然の災害とか？ 突風みたいな？ でもこんな一部だけ切り刻んでなぎ倒す突風なんてあるかなあ、むーん……はっ！ そうだ！」

首を傾げていそうな声を耳にしたセバルトは、心臓を鷲つかみにされた。

（げげ、見られた、英雄の力を使った痕跡を！ いやだが落ち着け、まだ『俺が』やったと知られたわけじゃない。それならリカバリはきく）

深呼吸をしてその場をいったん離れて森に入り、大きく回り込んで小屋の反対側に行く。そしてセバルトは、不思議そうに切断された木の枝を拾っている女の後ろで、両手を開いて声をあげた。

「うわあっ！ なんだこの有様は!？」

空とぼけて目を見開く。自分もさも初めてこの光景を見たというように。

「……って、あれ？ 何を？」

だがセバルトは本当に驚き目を見開いた。

女が袖や足首からぼとぼと何かを落としていた。

整地された地面に重たい音を響かせて着地したそれは。



「……重り？」

「異常事態発生よ！ 臨戦態勢、あなたも構えて」

女が振り向き、腰に携えた剣に手をかける。

（臨戦態勢つて、やつぱり大げさな騒ぎになりかけてる！ そしてなんで重り!?）

謎の状態だが、とにかく落ち着かせなければと使命を思い出しセバルトは一気にたたみかける。

「突然声をかけて驚かせてしまつてすみません。これ、どうかしたんですか。あなたは何か知つてますか？」

「全然。だから、警戒中。重りを外して実戦モードで」

「重りを……外し？ ええと、重りつて、なんでそんなものをつけてたんですか」

「なんでつて鍛えるために決まつてるじゃない。常住坐臥トレーニングは基本！」

（ええー。そんな基本聞いたことないんだけど）

とセバルトが困惑していると、女は袖をまくつて腕を見せてきた。見せられても。

「えー……うん、なるほど。いい感じの筋肉具合ですね」

「重りの成果だよね、うんうん」

女は嬉しうれそうに頬をゆるめる。

なぜ初対面で筋肉具合なんて言葉をお口にしているんだろうと思うが、腕を見せられてノーコメントというわけにもいかない。実際、鍛えてるのは見ればわかった。

「つて、それより周囲に警戒よ！ こんな変なことになつてるんだから！」

とりあえずしばらくセバルトも、一緒に周囲の様子をうかがった。

しかし当然何も起こらないので、しばらくするとようやく女は剣を収めた。

「危険はないみたい」

「ええ。ということはなんでしょう。異常気象とかでしょうか」

セバルトは何度も頷きながら言う。

「よくわからないけど災害とかそういうところかもねえ。最近そういうの起きやすいらしいし。想像だけで」

「なるほど、そういうところかもしれませんがね」

（なんとか俺がやったとは気付かれていないようだ。よしよし）

セバルトがほっとしていると、女が重りをつけ直して立ち上がり、杖を後ろに放り投げた。

（あ、つけないおすんだ）

「ところで、あなたはなんでここに？」

「え？ ええーと……僕は、散歩を！ 健康のためにしてらんです。そちらは？」

口から出任せを言い、質問を重ねられる前に相手にボールを投げる。

「あたしは冒険者ギルドの依頼よ。迷子の猫探し！ ……しよぼい依頼だけど、依頼は依頼だからね、やらないわけにもいかない。情報を集めたところ、この森に迷い込んだみたいなの。それで探してたら凄いな音が聞こえたから、何かと思つて来たわけ」

なるほど、ギルドの関係者か。これからはもう少し周囲の様子に気をつけようと反省しながら、セバルトは口を開く。

「僕はセバルト・リーツといいます。ただ散歩してるだけで暇ですし、ここで会ったのも何かの縁

ということ、お手伝いしますよ」

「へえ、セバルト・リーツ。魔軍と戦った英雄と同じ名前ね」

「ええ、偶然」

やはり名前は残っていて、知ってる人もいたか。だがセバルトもリーツも珍しい名前でも名字でもない、そこは同姓同名でも怪しくはないだろう。

実際、女もちよつと驚いたような顔をしただけで、すぐに続けて自己紹介をした。

「あたしはメリエ・ゼクスレイ。残念ながら有名人と同じ名前ってことはないけど、よろしくね。手伝つてくれるなら、もちろん助かるわ。早く見つけてあげたいし。怖がつてるかもしれないし、行こ、セバルト」

メリエは森の中へと入っていく。

（この場から離れるためにその場<sup>ばし</sup>凌ぎで手伝いを申し出て、怪しまれずに済んだのはいいけど、余計な仕事が出てしまった）

何事もスムーズにはいかないのが人生なのだなあ、と悟った気分でセバルトも森に入っていく。

「ムーちゃんさん、いたら返事してください」

ムーちゃんとは猫の名前である。セバルトはメリエと共に声をかけながら森の中を探索していた。メリエは金髪のツインテールを揺らしながら、セバルトの横を歩いている。

短いネクタイをつけたブラウスにズボンという格好で、腰には直剣を帯びている。背筋を真っ直ぐのぼし重心をぶれさせず堂々と歩いている姿は、なかなか剣士として様になっている。



セバルトはその横顔を見つめていた。

勝ち気な印象を与える目と結ばれた口。しかし表情を崩した時には優しげな雰囲気が漂うその感じに、なぜか懐かしさを覚えていた。

なぜだろるかと思えるが、手がかりは見つからない。だが、その引っかけりも同行を申し出たことの理由の一部であった。

「なかなか見つからないなあ」

メリエがこぼす。探索を始めてからしばらく経ったが、いまだ猫は見つからない。

その時、不意にメリエはその青い目を輝かせた。

「いいこと思いついた！」

いきなりメリエが地面に這はいつくばる。トカゲのように四よつん這はいになった。

「ええ……つと？」

(どこがいいことなんだ、俺はどうすればいいんだ、何か言った方がいいのか……はっ)

突然の謎の行動に混乱しかけたセバルトだが——びんと閃ひらめいた。

「なるほど、腕立て伏せですか。さすが常住坐臥トレーニング」

「いや、違ちがうけど。というかいきなり腕立て伏せしたらおかしいでしょ」

真顔で返してきたメリエに、セバルトが目を細めて言い返す。

「いきなり四よつん這はいになってる時点でおかしいですよ。トカゲですか」

「違ちがうから！ ちゃんと高度な考えがあるから。つまり、猫を探すのに人間の目線で探してたらダメだと思わない？ 猫の高さに、猫の手がかりはあるはずよ」

意外とそれっぽい理由があったのか、とセバルトが感心すると、メリエは首をきよろきよろと動かし、近くにあった木の幹に吸い寄せられるように近づいて行く。そして、目を大きく開いた。

「あいたっ！」

瞬間、木のうろから飛び出てきた硬そうなカナブンに額に体当たりされていた。おでこをさすりながら、しかしメリエは不敵に笑う。

「うう……夢中になりすぎたよ……でも、見つかった」

メリエが顎をしゃくって示した場所には、猫の引つ掻き跡があった。

「おお、本当にありました」

「ビーよ！　これが猫の気持ちになつた成果つてもよ」

「まさか本当に見つけるとは……やりますね。なかなかの慧眼」

「うむうむ。たくさん褒めるがよいよ」

満足げなメリエとともにさらなる手がかりを調べると、他にも猫の痕跡がある木が見つかった。それらを結んだ延長線上に歩いて行くことしばらく。

まあお。

「今！　今聞こえたでしょ！」

鳴き声に反応したメリエが耳に手を添える。セバルトも集中する。

まあお。

「上から聞こえますね」

「ええ……あ！　あそこ！」

メリエが木の上を指さした。

目をやると、人二人分くらいの高さにある枝の先の方で、黒い猫が動けなくなっていた。

「俗に言う、のぼったけど下りられなくなっただって奴でしょうか」

「どこが俗なのかよくわからないけど、多分そうね。獣に追われたか、魔物に追われたか。見た目の特徴も、目印って言ってた前足のリボンも一致してるし、間違いなし。よし。じゃあおろしてあげましょうか」

メリエは木の枝の下に行き、腰をかがめた。

セバルトが何をするのかと眺めていると、手招きをする。

「ほら、何ぼさつと立ってるの。乗るかかった船なんだから手伝ってよ」

「手伝ってといわれても、何をするつもりなんですか？」

メリエは、はあーやれやれと言った風に中腰のまま首を振る。

「肩車よ。そうすれば届くでしょ？」

なるほど、そういうことだったのかとセバルトは納得し……首を傾げた。

「普通僕が下では？」

「ふっ、甘く見てもらっちゃ困るわね。体格はあなたの方がいいけど、あたしは冒険者ギルドでバリバリやって鍛えてるの。余裕よ余裕」

「ほー」

その言葉に偽りはないだろう。ここまで歩いてくる中でメリエは、明らかに鍛えていて、こういう場所にも慣れてる者の動きをしていた。とはいえ、セバルトの方がもつと力があるのは間違い

ない。

「それでも僕が下になりますよ」

「なんで？」

「僕もあなたを乗せるくらい力がありますし、それに、猫の確保はあなたがやった方が格好がつくと思いませんか？」

「……ふむ。それもそうね」

メリエは少し眉尻まゆじりを下げた。

やはりな、とセバルトは思った。枝の上の猫を見るメリエの目でわかった。

「じゃあ、お言葉に甘えて……よっ」

セバルトが構えると、肩の上にメリエが飛び乗った。

「なんだか、思ったより重……ってそうか、重りが」

「あ、外すの忘れてた、あははー。まあ、気にしないで。あたしもいつもつけてるもんだしさ」

「ま、まあ大丈夫ですけど。いつもつけてるんですか？」

「ええ。あたしは強くならなきゃいけないから。さ、早く助けてあげよ」

確かに早くした方がいいなど、セバルトはそのまますくつと立ち上がる。

「バランス感覚いいですね」

肩の上で立つ格好になっっているメリエの足首を押さえつつ、セバルトが言う。

「体幹鍛えてるし。日々特訓よ、目標のために。もうちよい右。もうちよつと……そうそう、スト  
ップ！ よしよし、あたしは敵じゃないからねー。おとなしくしててよ、ムーちゃん」

「どうです？」

見上げながら尋ねると、メリエはクロネコに向かつて手を伸ばしている。

「大丈夫、届くよ。そうそう、良い子だからじっとしてて——それっ、確保完了！ よしよし、おとなしくしてて、えらいぞ。じゃあ、おろして」

セバルトが身をかがめると、メリエが地面に下りた。その腕にはしっかりと猫が抱えられている。「ありがとう、助かったわ」

「これくらいなら、お安いご用です」

（これでもうあの小屋の周りのことは忘れただろう。後顧の憂いを断って、楽しく楽な隠れ家ライフができるなら、今するちよっとした苦労はまさに、これくらい、だ）

むしろ心地よくさえあると思っているセバルトの前では、メリエが黒猫をおろして、背中を撫でていいる。猫は安心したような気持ちよさそうな顔で欠伸あくびをした。

「冒険者ギルドっていうのは、こんな仕事もあるんですね」

「基本的には平和だからこんなこともあるの。本当はあたしにはこんな小さな依頼は相応ふさわしくないんだけどね。もっと大きな派手な案件じゃないと」

口をうごかしつつ、メリエは手荷物から鶏肉の切り身を取り出し、黒猫の前に置いた。

猫は喜び勇んでガツガツと一心不乱にむさぼりつく。

その様子を安堵あんどした顔でメリエは眺めている。

「そんなものも持つてきていたんですか」

「猫ちゃんがお腹減らしてるかもしれないし」

「小さい案件だと言つてましたけど」

「本当に全くあたしには相応しくないわね。でもまあ、それでもきっちりやるのがプロだからね」  
餌を食べ終わった猫が、メリエの足に体を擦り寄せながら喉を鳴らした。

「もう変なとこ逃げちゃだめだぞ」

まあ。と返事をするように鳴き声を上げる猫。

見た目の割にかわいげのない鳴き声だとセバルトは思ったが、メリエはニコニコしながら、頭を撫でている。

「獣に追いかけられたか、魔物に追いかけられたかわからないけど、無事でよかった」

「最近結構魔物がいるみたいですね、物騒です」

「ええ。でもチャンスよ。あたしの鍛えた成果を発揮して、英雄に近づくチャンス」

「……英雄に近づきたいんですか？」

「ええ。格好いいじゃない。魔物をバサッと切り倒す最強のヒーロー！」

そう言つて拳を握る、その時にちらりと見えた手のひらは、たしかに鍛えている人間のものだ。セバルトは見抜いた。皮膚やタコの様子からわかる、腰に帯びている剣は飾りではない。あの重りもそういうことだったのか、とセバルトは妙に納得した気持ちになった。

「なるほど、英雄ですか」

もの凄く近くにゐるんだけどなると心の内で言うセバルトの目は、懐かしいものを見るような視線だ。自分も、初めて旅に出ようとしていた時は、こんな感じだった。

思い出にふけていると、メリエは持つてきていた籠に猫を入れて、手に持つて立っていた。

「とういわけで、無事にムーちゃん確保。ありがと、助かったよ、セバルト」

「お安いご用です。でも、気をつけてくださいね。魔物退治は猫探しより危険ですから」

「うん。トロールみたいなこれまでいなかった大物もいて、デーモンまで目撃情報があるのかなとか。何が起きてるのかしら……。まあ、それより先におうちに帰してあげよつか」

メリエの声に応えるように、ムーちゃんは顔を上げ、まあお。と鳴いた。

★

「それじゃあね、バイバイ、セバルト」

町に戻り迷子の猫を冒険者ギルドに届けたメリエは、断つたのだが、強引に報酬の一部をセバルトに分け、そして去って行った。

（彼女、なかなか素質はありそうだ。しかし英雄を目指したいか。こっちは英雄だとばれないように、と思ってるのにな）

複雑な表情を浮かべつつ、セバルトは再び隠れ家の小屋へと向かうことにした。まだ庭の整地は途中だ。

その途中、町の入り口近くに、あれがあつた。

「英雄のモニュメントか。こういうのがあるから、目指す人も出るのかもな。讀たえてくれるのはありがたい話だけど……ふーん」

セバルトはあらためてモニュメントを見て、台座に刻まれた文字を読む。そこには英雄——つま

りセバルトがいつ何をなしたか、ネウシントーの国の人が知る範囲で書いてあった。そしてその後に、このモニュメントの説明があった。

『彫刻家マルス・エレウスによってデザインされたこのモニュメントは、英雄の七つの資質を表したもので、積み重なっているそれぞれの層が、英雄が魔軍を滅ぼすことができた一つ一つの理由の表現となっています。すなわち、武力、魔法力、伝説の武具、魔への造詣ぞうげ、精霊の加護、製作技術、不屈の心。これらが積み重なることで英雄となり、魔領を一人で生き抜き、魔物を打ち倒すことを可能にしたのです』

（なるほど、魔軍を滅ぼすにはそんなものが必要だったのか！ ……初めて聞いたな、そんな説）  
セバルトが自分でそう言ったことはないので、誰かが後から考えたんだろう。想像力豊かな人がいるものだなとセバルトは思う。

しかし、そんなに外れてもいないとも同時に思った。ここに挙げられているものはどれも、魔軍との戦いの旅では有効に働いた。それにしても、これに書かれている英雄が、まさにこれを見ているとは、誰も思っていないだろうなあ、などと考えると、少しばかり愉快な気分になる。

くくつ、と笑いながら、セバルトはしばらく遠目に、モニュメントの前を監視していた。  
「つて、いつまでもそんなことしてる場合じゃない。隠れ家だ。あの小屋を何とかしようとしてた最中じゃないか」

それにしても知らない間にたいそうな物が作られてるっていうのは妙な気分だ。他にも後世の創作とかないだろうな、と嫌な予感を覚えつつ、セバルトは今度こそ小屋へと向かう。

もう道も完全に覚えていて、すぐに隠れ家の小屋にセバルトはやってくることが出来た。



到着すると、早速散らばった草木を掃除する。まとめて燃やして灰にすれば、肥料や害虫除けにも使えるので、あとで庭や菜園を作る際に役に立つだろう。

作業は夜まで及んだ。暗闇の中、赤い炎を見ながら、セバルトはしばし佇む。

何はともあれ、隠れ家の器は整った。次は中身を少しずつ入れていく段だ。

「まずは住めるように家具……いや、食料が一番先か。床に座って床で食べて床で寝ることもできるわけだし。町で買って持つてこよう。壺や樽もあわせて。そうだ、隠れ家がどれくらい完成に近づいたか、書いておくとわかりやすくていいかもな」

セバルトは再び小屋に入り、きれいになった小屋の様子を満足げに鑑賞しつつ、壁に石板を立てかけ白墨でメモしていく。

『隠れ家現状』◆磨かれた壁 ◆埃ほこり一つない床 ◆整地された庭 ◆灰（肥料や病虫害避けに！）  
『欲しい物』◆飲食物 ◆家具一式

「うむ。これはわかりやすい。思いついたら、欲しい物を書いていこう。ふっふっふ」

『隠れ家現状』にたつぷりと色々なものが書き込まれた所を妄想すると、頬が緩む。

しばし妄想に耽ると、セバルトは隠れ家の小屋を後にした。

楽しい妄想をしつつ町の宿へと戻るため森の中を歩いてる最中、しかしセバルトには一つの懸念も浮かんでいた。

メリエから聞いた話だ。

「危険な魔物が増えている、か。冒険者ギルドのイーニー達も言っていた。平和な世の中が続いていたようだけど、最近になって何か起きているのか……きなくさいな」

だとしたら、あまり具合がよろしくない。

もし対処不可能なレベルの魔物があらわれたら、セバルトがなんとかしなくてはならないかもしれない。だがもちろんそんなことをしたら、300年前の二の舞だろう。再び英雄として祭り上げられて忙しい日々になれば、隠れ家をこっそり改良していくという密かな楽しみが壊されかねない。(そうなたら困る。だからといって町に被害が出たら無視し続けるワケにもいかないだろうし。なんとかしなければ——どうすればいいかなあ)

考えごとをしながら、月明かりの下を町へと戻っていくセバルトは、再び森の中で人を見かけた。今度はメリエではない。もっと若いローブを着た少年が、杖つえを片手に、こちらに気付かないほど集中していた。そこそこ人がいるなら気をつけないと、などと思いつつ、セバルトが通りがけに眺めていると、少年の手からそよ風が吹き出した。

魔法だ。

そういえば、町をまわっている時に魔法学校を見たなとセバルトは思い出した。十代前半くらいに見えて、少しだぶついたローブを着ているし、魔法の腕前から見ても、その生徒だろう。

しかし、おそらく『ウィンド・ブリーズ』の風魔法は、近くにあった草の葉をゆつくりと揺らしただけで、非常に弱い威力だ。そんなに上手な使い手ではないらしい。

森はこういう風にも利用されるんだな、と思いつつセバルトは町に戻った。

「うう……ぐう……むう……布団が硬い！」

猫探しと小屋掃除の翌朝、突っ張った体でセバルトはこぼした。

日中色々あったので、体と頭を休めようと思ったがいまひとつ寝心地がよくない。

最安値クラスの宿は寝床も値段相応で、枕も布団もベッドも硬くて薄いのだ。

安宿のせんべい布団に安眠できず、隠れ家のことを考えたら目が冴えて眠れず、早すぎる時間に目が覚めてしまった。仕方ないので、日も出ていないが、前日に購入していた水と保存食を持って隠れ家に向かっていた。

「隠れ家だけでなく快適に暮らす方法もなんとかしないとなあ。せつかく屋根のあるところで眠れるんだから、柔らかいベッドで気持ちよく眠りたい。羽毛布団とか欲しいなあ……ん？ あれって」

昨日と同じ場所に、昨日の少年がいたのだ。

しかも結構な汗をかいている。長い間練習をしているらしい。今日も風の魔法を練習しているとこちらから見ると、魔法学校の課題かなにかだろうか。

（そういえば、昨日町を見物したときに、あの子が後をついてきてたな。何の用かはわからないけど別に害はないだろう、と気にせずにいるうちに俺を見失ったのかいなくなっていたけど）

何はともあれ今は隠れ家の方が大事、とセバルトは見つからないように森の中を歩き、荷物を運び入れた。

一仕事終わると気分がよく、爽やかな朝の労働も悪くはないと思っただが、しかし、もとをただせば質の悪い睡眠が原因。

「快適な生活のためには快適な睡眠が必要だな……そうだ、いいこと思いついた」

とセバルトは独りごち、何かに気付いたように眉まゆを持ち上げる。

思ったら行動が早いのがセバルトの思う自分のいいところである。

森を出て冒険者ギルドに直行する。素材に詳しい人と言えばメモットだ。

「水鳥ですか。東の湖には、グレーダックやゴールデングースなんかがありますけど……でもゴールデングースは激レアです。最近は見つかってませんし」

ゴールデングースの羽毛は、最高の柔らかさと保温性をもった最高級の布団の素材だという。

(そうとくれば、手に入れるしかないでしょ)

セバルトが思いついたのは、羽毛布団。

今使っている布団が駄目布団なら、ふっかふかの優等生布団を手に入れるしかない。それに、隠れ家を快適にする目的のためならば、快適な睡眠は避けては通れない。そこで、どうせなら、一番いい布団が欲しいと思ひ、メモットに相談したのだ。

しかし、最上級らしいゴールデングースの羽毛を使った布団は今ではエイリアのどこにも売っていないらしい——なら、自分で捕まえるしかない。

さらに町で情報収集をすると、東の湖周辺に他にも過去に目撃証言があった。なので、そのあたりの地理を確認して、いざ搜索開始と森へと向かう。

「……またいるな」

すると、またもや森の中で少年を見かけた。相変わらず熱心に風の魔法を訓練している。そして相変わらず、うまくいっていないようで、小さな風しか出せずにいるままだ——と、この日は少年

の方もセバルトに気付いたらしく、森を歩くセバルトの後をついてくる。

何かを決意したような顔をしたり、やつぱり引き返そうとしたり、迷っていたり、とんだか腹が決まっていけないようだ。ひそかにあとをつけているつもりかもしれないが、バレバレである。

（ふうむ。こうなつたら、ちょうどいい機会だし、先制攻撃しかけてやるかな）

「……ところで、何かご用でしょうか？ さっきからあとをつけてるみたいですが」

不意にセバルトはびたりと足を止め、顔だけを後ろに向けた。

息をのむような心配がしたしばらく後、太い木の幹から一人の人間が姿をあらわす。

ふわつとした茶色い髪の下顔は、まだやや幼げで、真面目そうな雰囲気か漂っている。そして手に短杖たじょうを持ち、大きめのローブを着た少年は、あとをつけていたことを看破され、気まずいような怯おびえたような態度をとっている。

「あの——ええと——す、すいません！」

と、突然少年は深々と頭を下げた。

セバルトは意表を突かれ、ぼかんとする。

「ご迷惑をかけようというわけじゃないんです。不快にさせてしまったらごめんなさい！」

頭を下げたまま、少年は言う。

どうも怖がつているらしい。やつぱり長年の魔物との戦いで険のある顔に……と若干落ち込みつつも、セバルトは半分むきになって明るい表情を作り、安心させるように肩を叩たたいた。

「いえ、責めているわけではありません。単純に、何が目的かを知りたいというだけです。何度か僕のあとをつけていた理由を。頭をあげて話してくれませんか？」

セバルトが促すと、少年はゆっくりと声を出す。

それはまさに絞り出す、という様子で明らかに緊張していた。

「……はい。まずは名乗らないと失礼ですね。僕はロムス・アハティと言います」

「ロムスさんですか。僕はセバルト・リートツです。どうぞ、よろしくお願ひします」

「よろしくお願ひします！ それで……あとをつけていた理由なのですが、お願ひがあるんです。こんなこと、いきなりで失礼だとは思つたのですけれど——」

ロムスは一つ息を吸い込んだ。

そして頭を上げ、決意めいた光を目に宿して。

「僕の、先生になつていただけないでしょうか」

え？

先生？

セバルトは、予想外のことにさすがに困惑せざるをえなかった。

「はあ……はあ。あつ、つ」

目眩がして、ロムスは木の幹に倒れ込むようにぶつかつた。節くれ立つた幹が手のひらをこすり、ひりひりと焼けるような痛みで気を取り直す。

ロムスは今日も魔法学校の授業が終わつてから一人で訓練をしていた。うまくできなかった風魔法の練習を、町から少し離れた森の中で黙々と。

学校での授業以外でも魔法のさらなる訓練は毎日の日課で、主に町の西や東にある森で行つてい

て、それは深夜や早朝にも及んでいた。

だが……目眩を起こして倒れそうなほどに練習をしても、全くといっていいほど上達の気配はない。しかし、ロムスはそれでもなお続ける。自分は魔法が苦手なままでいるわけにはいけないから。再び立ち上がり、杖を構え、訓練を再開する。

魔物の雄叫びと人間の叫びが聞こえたのは、まさにその時だった。気になって見に行ったらロムスが目にしたものだ。

それは、はるか過去に失われたはずの強力な魔法を操り、一瞬で強大な魔物を倒す男の姿だった。偶然セバルトが『紫電の糸』を使ったのを見たロムスは、家に戻り多くの蔵書をあたって、その見慣れない魔法が本当に過去の魔法であるかを調べた。

そして確信した。百年以上前に使いかたが失伝したと言われる、雷を操る魔法だということ。そう思ったら、体はもう動き始めていた。あの謎の魔法使いに教えを乞うために、町中を探し始めたのだ。

そして程なくして、幸運なことにセバルトを見つけることができた。あとはこういうだけだ。「僕に魔法を教えてください」と。

だが、ロムスはその一言をなかなか言い出すことができず、セバルトが先に声をかける格好となつたのだ。

「先生——ですか？」

「はい。セバルトさんが魔法を使ったところを、たまたま目にしました。僕が森の中で魔法の練習

をしてた時に、森の中が騒がしくなって、何かと思つて見に行ったら、ちょうど魔物をあつという間に倒したところだったんです」

「ああ、あの時の」

セバルトは合点がいった。

あの時、イーニー達以外にも心配があつた。だから誰かが見ていたとはわかつていたのだが、この少年だったか。

「あれは失伝魔法でした。勉強のために色々な本を何度も読んだ中にあの魔法がありました」

失伝魔法？

魔法自体は使えるが、その呼び名は知らない。魔法学校ではどう教わつてるのかと聞き出すと、ロムスは、失伝魔法とはずっと昔、強大な魔物と戦わなければいけない時代に編み出された大魔法であり、平和な時代が続くうちに必要も使い手もいなくなり、いつしか失伝した魔法のことだと答えた。

今は魔法使いでも知る人は少ないらしい。ロムスは勉強のために色々な本を読んでいて、それについての記述を見つけたから知っていたということだが。

（見たことのない魔法……なるほど。イーニー達の反応はそういうことか）

長い時のなかで、セバルトのいた時代の魔法は失われてしまったということらしい。それを使える当時の人間であるセバルトは、古の魔法を復活させた凄<sup>まじ</sup>い魔法使いだと、この少年——ロムスに思われているようだ。

（当時はありふれてた魔法を使つただけなんだけどなあ。当時でも普通じゃなかった、真の大魔法



はまだこの時代に来てからは使つてないし)

とはいえ今は失われた魔法ならば、昔にどれほど普通のものだったとしても現代の人からすれば  
凄いものだと感じるのはセバルトにも想像はつく。

「僕は世間知らずでセバルトさんのことを存じていないのですが、そんな凄い魔法を使えるという  
ことは、非常に優れた魔法使いなんだと思います。だから、教えて欲しいんです、僕に魔法を。そ  
んなに凄い人なら、僕でもちゃんと魔法が使えるようにしてくれるかもしれないと思っただんです」  
ロムスは必死の様子でそう言った。

(困ったな……)

表面上は何でもない様子を取り繕いつつ、セバルトは頭を悩ませる。

英雄ということを隠して、森の中の小屋でお忍びのスローライフという野望があるのに、特別な  
力があると知れ渡ったら、そうさせてもらえないかもしれない。あまつさえその力について教えて  
くれなどと……。

(いや……もしかして)

その時、セバルトの頭の中で一瞬の閃きひらめきが起こった。

(これは、むしろ逆に利用できるんじゃないか?)

思い浮かんだのは、三角形や四角形などの様々な形になされた石が七層積みあげられた柱。  
自分に未来に来てしまったことを気付かせた、町の入り口にあった英雄のモニュメント。

セバルトの眉が持ち上がる。

イーニーやメリエは、最近、この辺りでは珍しく強力な魔物があらわれると言っていた。それに

謎の天変地異も起きているらしい。そうすると、これから先もより強力な魔物などによるトラブルが起きかねない。

そうなった時……おそらくセバルトはそれを見捨てられない。

隠れ家で快適に静かに暮らそう、面倒事に巻き込まれないようにしよう、と思っけていても、もし町が壊滅的な被害に遭うような危機が訪れ、解決できるのは自分だけとなったら、さすがに見ぬ振りはできないだろう。

(知らん振りしたいけど！ とつても！)

もしそんな事態が起きれば、また英雄に仕立て上げられてしまいかねない。それは非常に困る。

だが、解決策がここにいる。

セバルトは、目の前にいるロムスに目を向ける。

英雄を作ればいい。町に危機が、国に危機が、世界に危機が訪れた時に、それを救える自分以外の英雄がいれば、自分が動く必要がなくなる。

自分が教師となり、英雄を育てる。

タイミング悪くロムスには力の一端を見られてしまった。だがそれは逆に言えば、見せても今以上に悪くはならないということだ。

だったら積極的に見せて教えて、英雄の力を持つ者へ育て上げるチャンスだ。見事英雄が生まれれば、何が起きてもお任せで、セバルトは隠れていられる。

そして、それは一人ではない。

『彫刻家マルス・エレウスによってデザインされたこのモニュメントは、英雄の七つの資質を表したもので、積み重なっているそれぞれの層が、英雄が魔軍を滅ぼすことができた一つ一つの理由の表現となっています。すなわち、武力、魔法力、伝説の武具、魔への造詣ぞうけい、精霊の加護、製作技術、不屈の心。これらが積み重なることで英雄となり、魔領を一人で生き抜き、魔物を打ち倒すことを可能にしたのです』

英雄のモニュメントには、こう記述があった。七つの石柱を積み重ねて作られたというそれは、英雄の七つの資質を表現したものだ。

ロムスは魔法使いのようだが、セバルトは厳しい戦いの中で、剣術や体術も駆使していた。魔法だけでは、同じようには戦えないだろう。

ロムスでなくとも、一人で全てまかなえる人物が見つかるかは疑問である。

だが、一人で英雄になる必要はない。

七つの資質をもった者達に、セバルトの持つ力をそれぞれ伝えていく。それら七人を揃えることができれば、あのモニュメントのように自分に自分と同等に至るはずだ。

その暁にはセバルトは何が起きても英雄として振る舞う必要はなくなり、何があっても揺るがない完全なる優雅なスローライフが完成する。完成させる。